

## 生物科学系

教員数	教員等数 (人)	教授 19 (20)	助教授 16 (14)	講師 15 (17)	助手 4 (7)	技官〔準研〕 6 (4)		
	異動状況 (人)	退職・転出 5 (12)	昇任 - (3)	採用 8 (6)	学内 -			
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数				
		国内	国外	国内	国外			
	82 (57)		172 (165)		227 (178)			
	受賞数	4 (8件)						
	研究費等	採択件数		採択率(%)	金額(千円)			
		科学研究費		29 (43)	37.2 (69.3)	313,400 (180,300)		
		学内プロ		15 (18)	39.5 (42.8)	10,200 (15,782)		
奨学寄附金件数・金額		5件	3,477千円	(8件 7,100千円)				
受託研究件数・金額		19件	119,109千円	(14件 137,906千円)				
受託研究員		1人 (人)						
施設・設備								

・ ( ) は前年度の数値を示す。

### 1 生物科学系の活動

生物科学系は、本学のライフサイエンス関連組織のなかで、生物科学のコアとなる基礎領域の研究、教育を担っている。多様な生物群を多様な手法と視点で研究する広範な研究者を有する点に特徴を有する組織であり、それぞれの分野で内外において相応の役割を果たしている。(研究面)論文、著書数、学会発表ともに昨年度に比べて増加し、全体的に活動は引き続き活発である。(教育面)生物学類担当の教官はオンラインジャーナルの発刊、カリキュラムの検討、学生による授業評価等について活発に活動し、独法化後を見据えた自己点検、改革を進めた。生命環境科学研究科の専攻についても、院生との懇談会や入試改革、カリキュラムの検討を行い、改革に向けての活動を行った。(研究資金)科学研究費の採択件数、採択率が減少しているが、これは教官分のみを考慮した数字であり、ほぼ例年通りの実績である。金額の大幅な増加は未来開拓学術研究が科学研究費の扱いになり加算されたことによる。一方、学内プロ、奨学寄附金、受託研究費については減少傾向にあり、構成員の意識改革が必要な部分である。(研究環境)総合研究棟の完成に伴い、5名の生命共存科学専攻の専任教官が移動することをふまえて、実験スペース、共同スペースの全面的な見直しを行い、狭隘を解消する措置をとった。しかし、依然として多数の機器類が実験室に収納できない状況があり、慢性のスペース不足の状況にある。本年度の間接経費は、大部分を総合研究棟の移転のために費やしたが、一部でLANの拡張の予備的配備、セミナー室の整備を行った。

### 2 自己評価と課題

学系全体としては、研究、教育活動ともに活発であり、評価できる。学系発議の人事はすべて公募で行い、外部から新任の教授、助教授、講師の採用を決定した。内部昇任はセンター発議人事およびバイオシステム研究科発議各1件しかなく、内部の優秀な助教授や講師の昇任の機会が減少したことは懸案事項として残った。21COEが不採択となったことは、今後に向けて検討課題として残された。

### 3 その他特記事項

学系構成員の受賞は4件。日本藻類学会論文賞(井上 勲教授)日本農業気象学会普及賞(及川武久教授)、ベストインテンシング・ベストアイデア賞(神崎亮平助教授)、Ecological Research論文賞(莫 文紅助手)